

大友時代を  
生きた人々

鹿毛 敏夫



長方形木棺に伸展された状態で出土した16世紀の推定キリシタン人骨(大分市)

ルイス・デ・アルメイダ

府内の育児院開設に尽力

ルイス・デ・アルメイダは、ポルトガル出身の医師免許を持つ商人で、16世紀の日本に初の西洋医学による病院をつくったことで知られます。1525年ごろにリスボンで生まれ、83年に没しています。

貿易商としてインドのゴアや中国のマカオに渡って富を蓄え、1552年に来日。当時、日本国内で活動していたイエズス会宣教師らと交流し、彼らを経済的に援助しました。

豊後府内(大分市)にいた司祭ハルタザール・ガゴが、弘治元(1555)年にポルトガル国王に送った書状によると、この年に府内を訪れたアルメイダは、日本人のいわゆる「間引き」の習俗を問題視し、幼児の救済と養育のための施設を設けるようイエズス会に求めています。意向に賛同したガゴは、領主大友義鎮(宗麟)の許しを得て、府内に育児院を開設し、そこにキリスト教徒の乳母と雌牛2頭を整えました。

さらに翌年には、大友氏から寄進を受けた土地を拡充させて、外科・内科とハンセン病科を備えた総合病院を創設し、アルメイダはここで外科医療を担当しています。

府内のこの病院や教会の跡地と推定される場所の考古学調査では、複数の人骨埋葬墓が見つかりました。中でも注目されるのは、幼児を葬った8基の墓群と、長方形の木棺に頭を北に向けて仰臥伸展葬した成人骨の発見です。

その後の調査によると、このうち、7〜8歳以下の子どもを葬った墓群は、いずれも1560年代のもものと分析され、それらは、弘治元年に開設した育児院で死亡した子どもたちの墓と考えることができます。

一方、木棺に伸展された成人を含む規則的に配列された5基の成人墓と、その周囲に追葬された4基の幼児墓は、1570〜80年代のものとの解析結果が出ています。これは、長方形木棺に伸展で埋葬されたキリシタンと、方形木棺に横臥屈葬という日本の伝統的埋葬様式で葬られた非キリシタンが、混在しているものと推測されています。病院や教会施設で死を迎えた人々を、キリシタンか否かを区別することなく埋葬したものと考えられるでしょう。

弘治元年9月にガゴがポルトガルのイエズス会員に宛てた書状には、日本での埋葬について、「亡くなるたびに大勢のキリスト教徒が参集し彼のため棺、すなわちそのための木の箱を整えて、その中に遺体を納めて埋葬します」と記しており、発掘状況と一致します。

(名古屋学院大学国際文化学部教授)

11月1回掲載